

「鳥獣戯歌合物語」論

人文社会科学部文化創生課程文化資源学コース

長谷川 佳奈

序章

『鳥獣戯歌合物語』は、鳥、獣、虫が宴会し、その席次をめぐる歌合を行う様子を描いた「歌合物語」である。作中では、これらの異類が擬人化され、人間と同様に和歌を詠み、自らの由緒を競う。本作は上下二巻から成り、次のように三つのパートで構成されている。

- 上巻： 正長元年、吉野山に集まった鳥たちが、自らの詠まれた古歌などを引き合いに出しながら、酒宴の席次を争う歌合を行う。
- 下巻（前半）： 舞台を木幡峠に移し、獣たちが同様の歌合を行う。
- 下巻（後半）： 秋の嵯峨野を舞台に、今度は虫たちが歌合を行い、最後は彼らが姿を消して物語が終結する。

本作の成立年代については諸説あるが、先行研究では室町時代の異類物、あるいは近世初期の『四生の歌合』や内閣文庫蔵『鳥歌合』、同蔵『鳥虫あはせ』といった歌合物語群の中に位置づけられると考えられている。これらの作品と共通するのは「異類が歌合をする」という点だが、本作には判者が存在せず、明確な勝者が決まらない場合があることに加え、本作は説話を用いた解釈を特徴とする中世注釈書を、物語の形で受容・展開しているといった独自の差異が見られる。また、出てくる鳥獣については多くの重複が確認される。本作には鳥類三三種・獣類一一種・虫類一五種が登場し、引用されている和歌は一二三首に及ぶ。そのなかでも鳥類の登場数と詠歌数はとりわけ多く、作品の中心的要素を形成している点が注目される。

以上を踏まえ、本研究では、とくに鳥類を軸に据え、これまでの研究であまり深く触れられてこなかった「題材選定」と「和歌表現」に焦点を当て、本作の作品の独自性と同時代における位置づけを明らかにすることを目的とする。

第一章

第一章では、本作に登場する「鳥」たちの選定基準について分析する。本作の題材の特異性を検討するために一つの指標として『古今和歌六帖』を参照した。先行研究によれば、『古今和歌六帖』の歌題は六帖題と称され、題詠と密接に関連しつつ受容されてきた。加えて、鳥獣戯歌合物語が成立したとされる時代においても引き続き注目されていたことが分かっている。そこで、本作の題材が、六帖題に立項されているか否かを指標として比較調査を行った。その結果、登場する鳥獣の多くが『古今和歌六帖』に準拠しており、本作が伝統的な

和歌の枠組みを強く意識していたことが明らかとなった。

つづいて、六帖題の枠組みを利用し、六帖題に含まれない鳥の選定意図を考察した。まず、特徴的な題材として、あぢの村鳥、鶯、斑鳩を取り上げる。あぢの村鳥では、視覚的描写に重点を置いた和歌を紹介することで、他の鳥との差異化を意図していることを明らかにした。鶯については西行の歌を選出していることと、『平家物語』の怪異譚と和歌の描写を比較することで、上代以来の物悲しさや無常の象徴としての伝統的イメージに基づきながらも、鶯の正体不明の存在という性格が物語を彩る説話的なアクセントとなっていることを指摘した。さらに斑鳩については、地名と鳥名の多義性について分析した。斑鳩は、鳥としてではなく、もっぱら地名として詠まれるという特徴がある。そこで斑鳩の地に結びつく聖徳太子伝説を示すことによって、鳥としての斑鳩にも由緒や権威性を付与していることを論じた。

以上に対して、六帖題ではないものの一般的な歌材である鷗、雲雀、雀、山からについて検討した。鷗は冬の景物として伝統的な詠法に準拠していることを確認し、雀、雲雀については日常的・写実的風景の描写について検討した。特に雲雀については、『万葉集』以来の飛翔する雲雀を詠んだ歌ではなく、「雲雀の床」を詠んだ藤原定家の歌を筆頭に挙げている。「雲雀の床」という歌語を重視していることを指摘し、藤原定家を正統とする意識がみられることを論じた。

さらに、作中で姿を見せない鳥として描かれるかほ鳥、および古今伝授三鳥についても考察し、いずれも定家以来の歌学的解釈に従っていることを明らかにした。具体的に、「古今伝授三鳥」とは、『古今和歌集』の秘説のなかで特に重要視されていた喚子鳥、稲負鳥、百千鳥の三鳥のことを指す。本作には喚子鳥、稲負鳥の2羽が登場する。喚子鳥については、『毘沙門堂本古今集注』等の説話を取り入れ、物語性を付与している点、稲負鳥については、注釈書的な知識と、秋の景物としての伝統の両面を描き出している点を指摘した。百千鳥は本作に登場しないが、他の鳥と重複する可能性があるため登場しないという合理的な選択であったと考える。

以上の分析から、本作は、特異な題材を出しつつも、その表現についてはあくまで正当な和歌の伝統を逸脱しない範囲で描かれているということが確認できた。

第二章

第二章においては、本作の「場所」と「時間」が持つ象徴性について考察する。本作のように、特定の場所・時間を明記していることは、ほかの異類歌合には見られない特徴である。

まず舞台設定について、鳥は吉野、獣は木幡、虫は嵯峨野という三つの場所が選ばれている。これらは、『古今和歌集』仮名序の引用に基づく鳥と吉野の結びつき、伝統的な「木幡の駒（馬）」のイメージ、秋の虫や蛙がもたらす嵯峨野の寂寥感など、文学的背景に合致した設定であるといえる。

次に、冒頭に記される「正長元年（1428年）」という時間設定の意図を考察した。この時期は南北朝の動乱が収束に向かいつつも、秩序が不安定な時代であった。南朝の拠点であった吉野から始まり、南北朝合一の地ともいえる嵯峨野へと至る物語構成は、当時の歴史的背景を構造的に反映している可能性がある。

この仮説に対し、まず、「正長元年」を成立年代とする可能性を検討したが、書写時代の考察や他の異類歌合物語の成立を勘案すると支持し難いと結論づけた。むしろ、南北朝の動揺と終焉を象徴する時代設定として機能していると考えられる。同時代の御伽草子における吉野・嵯峨野の描写と比較しても、本作のように南北朝期を強く想起させる手法は特異である。さらに、挿入歌が二条派（南朝主流）や京極派（北朝主流）の勅撰集をどう扱っているかを調査した結果、本作はいずれの派閥にも傾倒せず、むしろ藤原定家の美意識を「共通基盤」として包摂していると結論づけた。

終章

本研究では「題材選定」と「和歌表現」に焦点を当て、本作の作品の独自性と同時代における位置づけを明らかにすることを目的として考察を進めてきた。まず、本作は正統和歌の規範を前提としつつ、異類という題材を用いて、中世注釈書に由来する説話的な知識を物語の中に包摂する「物づくし」としての性格を持つ作品であると評価できる。そして、この点において、『鳥獣戯歌合物語』は、近世初期の歌合物語群の中において、単なる異類歌合物語の一例にとどまらず、和歌の正統的価値観と注釈文化とを併存させる独自の意義を有する作品であると位置づけられると考える。